

私の幼児教育論Ⅳ

“保育の基本”（二）

神 沢 良 輔



三、保育の基本（二）

——保育とのかかわり合いの中で——

(iv) 幼児の行動の是認・否認は、まず保育者の目（視線）で

(1) 幼児の行動の是認・否認は、まず保育者の目（視線）で

幼児は何かあると、必ずといってよいほど保育者の目を見
る。それは、保育者がどこにいようとなされることであり、保育
者との物理的な距離にはあまり関係がない。

幼児は、友だちと何かいい争いをしたり、物のとりあいをした
り、けんかをしたり、人のじゃまをしたり、製作がうまくできな
かったり、昼食が全部食べられなかったり、園での簡単なきまり
を守れなかった時など、何かあった時には、必ずといっていい
くらい保育者の方を見る。それは、保育者にいろいろな意味での

援助をしてもらいたいというためにすることもあるだろう
し、自分の行動を認めてもらいたいということのためにしたりす
るであろう。また、時には保育者に他人の行動を拒否してもらい
たいということのためにすることもあろう。

もちろん、幼児は、前述のようなどちらかといえば、否定的
な、危機的などと思われるような場面ばかりではなく、絵がかけた
からとか、積木がうまくつめたからとかというような、肯定的な
場面においても、やはり同様に保育者の承認を求めるために、保
育者の目を見るのである。

いずれにしても、このような場合の、幼児と保育者との間の目
と目（視線と視線）との交流は、幼児のつぎの行動を決定するた
いせつな働きをするのである。つまり、幼児は、保育者の目の中
に——もっと広く保育者のからだ全体といってもよいであろう——

—認められる感情をくみとって、自分の行動を決定しようとしているのである。

それは、幼児にとって、保育者の目は、自分に対する愛情を示すと同時に、一方では、園における行動の価値を決定するものなのだからである。だから幼児は、ひとつひとつの行動の前後に、保育者の方を見て、自分の行動の価値を保育者の視線によって判断しようとしているのである。つまり、幼児の行動の価値を決定するのは保育者であるといえる。

それは、幼児にとっての価値は、大人のもっている価値に同一化することにおいて、価値としての意味があるのであり、この中で幼児の価値体系が形成されているといってもよいのであろう。もっと端的ないい方をすれば、幼児は価値を大人から学習して、自分の価値体系をつくりあげていっているといってもよいであろう。

しかも、幼児の価値判断は、現在進行している。きわめて具体的な場面における、具体的な行動の中でしかできないのである。つまり、幼児に、大人がことばでいくらうまくいっていても、ことばのもつ抽象的な一般化されやすい概念のために、幼児には理解できない場合も多いし、また、その行動が終わってから、ある時間的な経過をともなったあとであれば、なおさらのことそれを

思い出すことだけでも幼児には困難になってくる。ときには、過去のことについての価値の判断を、幼児は現在の行動における価値をとりかえて判断するということにもなる。

だから、幼児が保育者の目を見るのは、きわめて具体的な幼児にとってもっともわかりやすい場面です。保育者の価値判断を求めているということが出来る。そのため、常に保育者は、ひとりひとりの幼児と交わす目と目の交換には、常に、このような価値についての判断もしてあげているということを理解しておかねばならないだろう。

そして、幼児にとって、保育者のやさしい目は、行動の是認としてうつり、その行動をさらに元気に続けていくだろうし、承認された行動として、今後において同じ事態があれば、またくり返すということになる。一方、保育者の目から見て、否認されていると思われる行動は、中止するか、また、別の是認されていると思われる行動に変わっていくだろう。

(2)

だから、保育者は、ひとりひとりの幼児の行動をつねに見守ってやる必要があるし、幼児が、保育者の目を求めている時には、いつでも応じられるようにする必要があろう。

幼児が保育者の方を見ても、保育者の目との交換がなかったり、そこに保育者がいなければ、幼児は保育者に受容されないし、また価値の判断ができなくて迷ってしまつて、行動を続けられない場合すらでてくるし、そのために情緒も不安定になり、でたらめな退行的な行動をとるような場合もでてくる。保育者の目（視線）は、幼児にとって、もっとも大切なものなのである。

私も園長時代の思い出として、保育室やその近くにいる時、やはり、もっとも気になるのは、ひとりひとりの幼児の目と目との交換が自分としてうまくできたかということであり、いつも、幼児と目があつた時に、どのように反応してあげたらよいか戸惑うことが多かった。

それは、担任の保育者と、私の価値の判断とが一致しているかどうかという不安があり、ひとりひとりの幼児や学級全体の幼児の動きの方向性の理解が不十分なために、その間に他の幼児の視線を無視してはいないかというあせりでもあつた。そのため、私もわからなくなると、ついつい保育者の方を見てしまうことが多くなつたりもした。

それは、一方では、保育者が、ひとりひとりの幼児の目（視線）を無視しないように、がんばってほしいという願いであり、他方では、保育者が、つねに一貫性をもつた価値判断でひとりひ

とりの幼児と目と目の交換をして、幼児の行動を安定化させ持続させてあげるために、努力してくれているんだという期待でもあつた。

でも、保育者とても人間であり、多くの幼児を扱っている以上、ときには無視したり、無反応であつたりするような見落しもでてくる。だから、そのようなことになつた幼児が、悲しそうな、情けなさそうな、ときには怒りをもつたまなざしで私を見つめているのに出会うこともある。それが、保育室の中や、その近くならまだしも、わざわざ園長室の前まできて、何かしら訴えている幼児の表情を見ると、どのようにしてあげたらよいか全くわからなくなつてしまうのである。このようなことになると、私のような無能な園長は、ただただ担任の保育者に、なんとかしてあげてほしいと祈るのみであつた。

(3)

このように見てくると、幼児と保育者との目の交換ということ、幼児の指導そのものであり、指導の基本であるということにもなる。もちろん、保育、教育、指導などということは使われ方や概念の規定の仕方によつては、このようなことは別のことばで呼んだ方がよいのかわからないけれど、いずれにしても、幼児

と保育者との間の目（視線）の交換は、幼児の行動にきわめて大きな影響を与えることだけは事実である。

つまり、幼児は保育者に、自分の感情や行動についての受客をつねに求めるということであり、それが、保育者に受客されれば、幼児は安定するだろうし、その行動を承認されたものとしてさらに発展させることになろう。そして、そのような行動を通して、幼児は幼児なりの価値づけをしていくだろうし、そこに幼児の人間としての発達が認められるということになる。

しかも、その価値づけは保育者によってなされるものであり、そのために価値づけには、つねに一貫性をもつということが要求されることになる。また価値の一貫性を保つためには、当然ながらそれは意識的なものであり、意図的なものであり、目標的なものでなければならぬ。だからこのような、価値の一貫性は、大げさにいえば、一方では幼児の道德的な心情の芽ばえとなるだろうし、他方では美的な、情操的なものの芽ばえにもつながるだろうし、それは、社会的、知的な発達の基本ともなっているのだと思われる。

しかし、その場面は、人間対人間という、人間としての関係の中でなされるのである。それは、第三者から見れば、きわめて非合理的とも思われることの中にあるといつてよいであろう。つま

り、幼児との関係は、決して合理の中での関係ばかりではないし、もっと人間らしき、人格と人格とのふれあいがある、その基本にあるということである。

だからこそ、そこに指導があるのだといつてもよいと思われる。だから、保育者は、一見、非合理とも思われるこのようなひとりひとりの幼児との交流の中で、合理性、意識性、方向性をもって、ひとりひとりの幼児の発達を十分に促進できるようにする必要があるので、そこに指導の基本があるのだということになる。

また、いうまでもなく幼児を否認する場合は、決して幼児の感情や人格を否認しているのではなく、幼児の行動を否認しているというのではなくてはならない。そのためには、そのようなことが、幼児なりに理解できるように、相互に信頼される人間関係をつくっておくことが必要である。

なお、これまで、目と目との交換を中心のべたが、実際には幼児との関係は、視線のみではなく、ことばをも同時にともなった保育者との交換になることが、きわめて多い。このようなことばをともなった交換ももちろん大切にしなければならぬが、やはりその基本には、目と目との交換があることを忘れてはならないだろう。

(つづく)